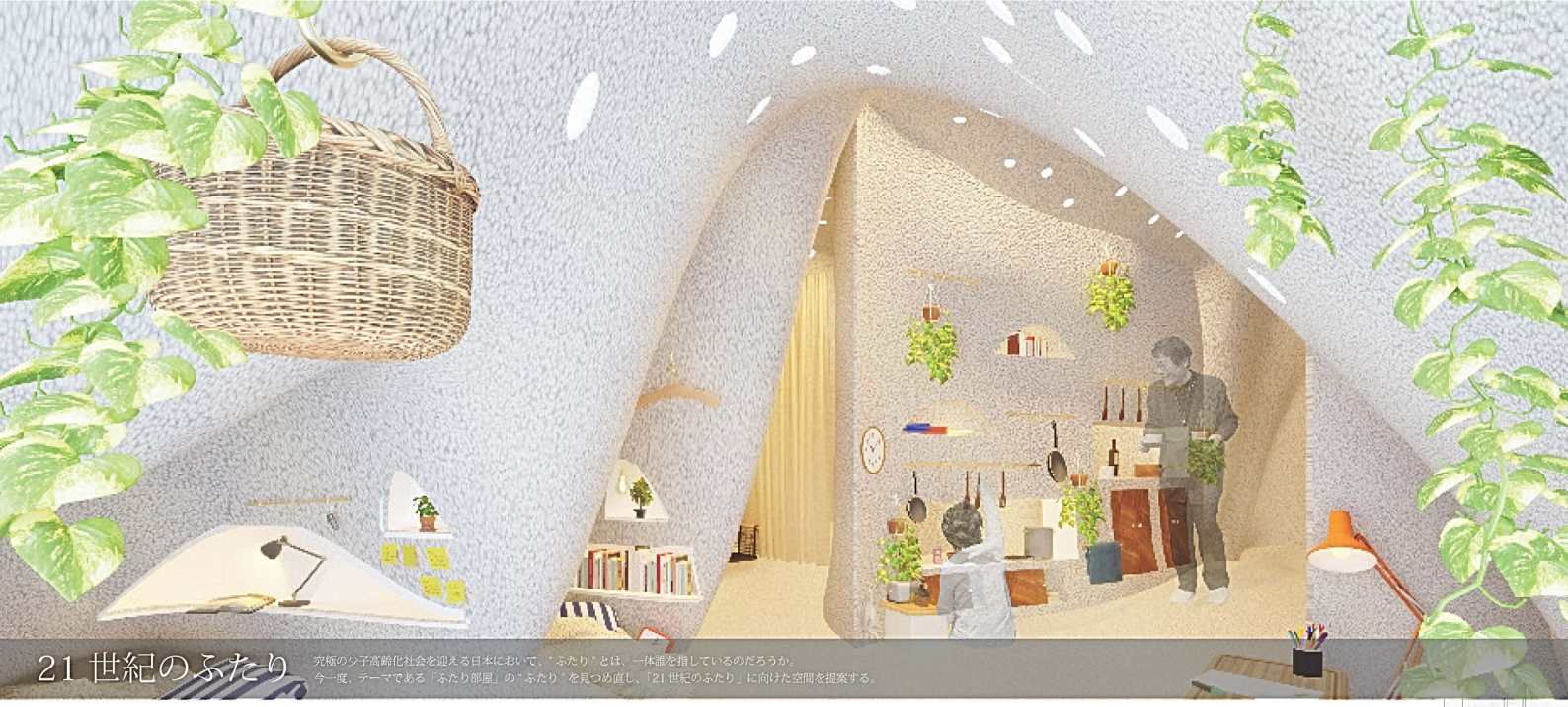
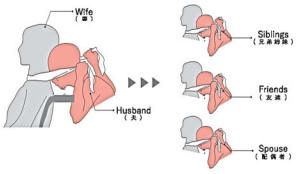


21 世紀のふたり

究極の少子高齢化社会を迎える日本において、“ふたり”とは、一体誰を指しているのだろうか。
今一度、テーマである「ふたり部屋」の“ふたり”を見つめ直し、「21 世紀のふたり」に向けた空間を提案する。

1. 私たちが見つめる “ふたり”

Concept



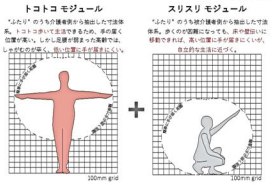
超高齢化社会を迎えた日本では、1 世帯に 1 組、老夫婦が自らの手で殺め、“ふたり” が “ひとり” になっている現実がある。少子高齢化社会でふたりが直面する老々介護の壁。

そして未来、世紀末に老人となる私たちは究極の少子高齢化社会の中で同じ壁にぶつかるだろう。しかしその相手は夫や妻なのだろうか。単身者が増え続ける今、未来の老々介護は兄弟や友人が相手になるかもしれない。

老いとともに身体が不自由になり、歩行が困難になった相方が、それでも「生」への魅力感を感じず、これまでと同じように支え合って暮らせる「21 世紀のふたり」のためのふたり部屋を提案する。

2. “ふたり” が作り出す 2 つのモジュール

Proposal

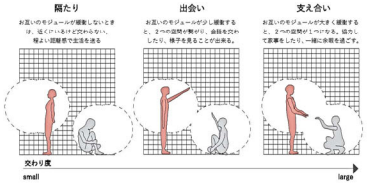


老々介護、それは施設に入らずに “ふたり” で暮らすことを選んだときに立ちはだかる壁である。夫婦・友人・兄弟の関係性に、相方が老いや病気に倒れ、自立的な暮らしが不可能になった時、「介護者と非介護者」の関係性が入り込んでくる。「助ける人と助けられる人」、この関係性が最期には友人や兄弟、配偶者を殺めることにまで発展させてしまうのだ。

本提案では “ふたり” がこれまでと同じように、助け合って暮らせる空間で、相方が車いすになっても自立して生活するために、老々介護の関係性から助け合いと自立を生む「**トコトコ**モジュール・**スリスリ**モジュール」を抽出した。

3. 異なるモジュールが創り出す “ふたり” だけの空間

Design method

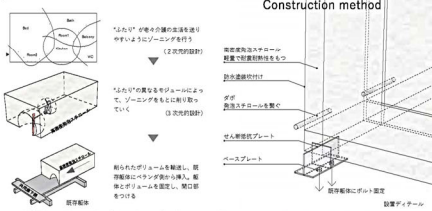


一緒に暮らすことを選んだ “ふたり” から作り出される 2 つのモジュールによって削り取られるように空間が出来上がっていく。そうして生まれた空間の中には、“ふたり” がそれぞれ出来ることと出来ないことがあり、異なるモジュールが補完し合って暮らしていく。

ときに、暮らしの中で出会いを生んだり、モジュールの違いを活かした支え合いの場となったり、そしてときに距離をとったりしながら、配偶者だけでなく、親友や兄弟とのふたりだけの空間を創り出していく。

4. 賃貸を活かした提案の空間化

Construction method



賃貸住宅で住まい手の自由な空間を作り出すことは難しい。それはバリアフリーならなおさらである。そこで「賃貸の仮設性」と「設計手法の空間化」を実現するために「高密度発泡スチロール」で住空間を設計する。軽量で断熱性と耐久性が高い「高密度発泡スチロール」は住空間を快適にするだけでなく、施工性にも期待できる。2400 ㎜× 4000 ㎜× 7000 ㎜分の「高密度発泡スチロール」はトラックでの輸送が 1 度に可能で、軽量なため、賃貸住宅への挿入も簡易的に行うことができる。

既存の躯体と「高密度発泡スチロール」はせん断抵抗プレートとベースプレートを介してボルト接合し、住まい手が変われば、発泡スチロールごと簡単に入れ替えることも出来るため、住まい手に合わせた自由度の高い賃貸住宅が可能になる。

平面図　S=1:30

0　0.5　1　2m

ふたりの異なるモジュールがちょっとだけ緩衝し合う寝床は、やんわりとふたりが繋がれる空間が生まれる

高密度発泡スチロールによる緩やかな起伏を使って、スリスリと行きたい場所に行くことができる

究極の少子高齢化社会の中で、２１世紀のふたりがお互いに支え合って暮らしていくために、「トコトコモジュール」と「スリスリモジュール」を使った空間を提案している。平面図では、お互いのモジュールの緩衝度合いで生まれる空間とその使い方を示した。それと同時にやわらかく湾曲した床で車いすを使わずに、どのような移動が生活の中で行われるだろうか。